

S1-B2

Fujitsu Experience Day 2026

FUJITSU

来場者提供版資料 ※お客様情報は含まれておりません

暗黙知をつなぎ、AIで進化させる

—大規模基幹システム開発での課題解決に向けた実践的アプローチ—

全国共済農業協同組合連合会
全国本部 参事（AI統括）
石原 秀紹 様

富士通 Head of Global Technology Practice
Uvance Wayfinders
三原 哲

2026年7月15日

本資料は作成時点における情報および見解に基づくものであり、将来の内容を保証するものではありません。
内容は予告なく変更される場合があります。

講演者紹介



全国共済農業協同組合連合会
全国本部 参事 (AI統括)

石原 秀紹

- 新卒で全国共済農業協同組合連合会入会
- 商品開発部門、コーポレート部門等を経て、
2025年4月から参事として、会内のAIの取組みを統括



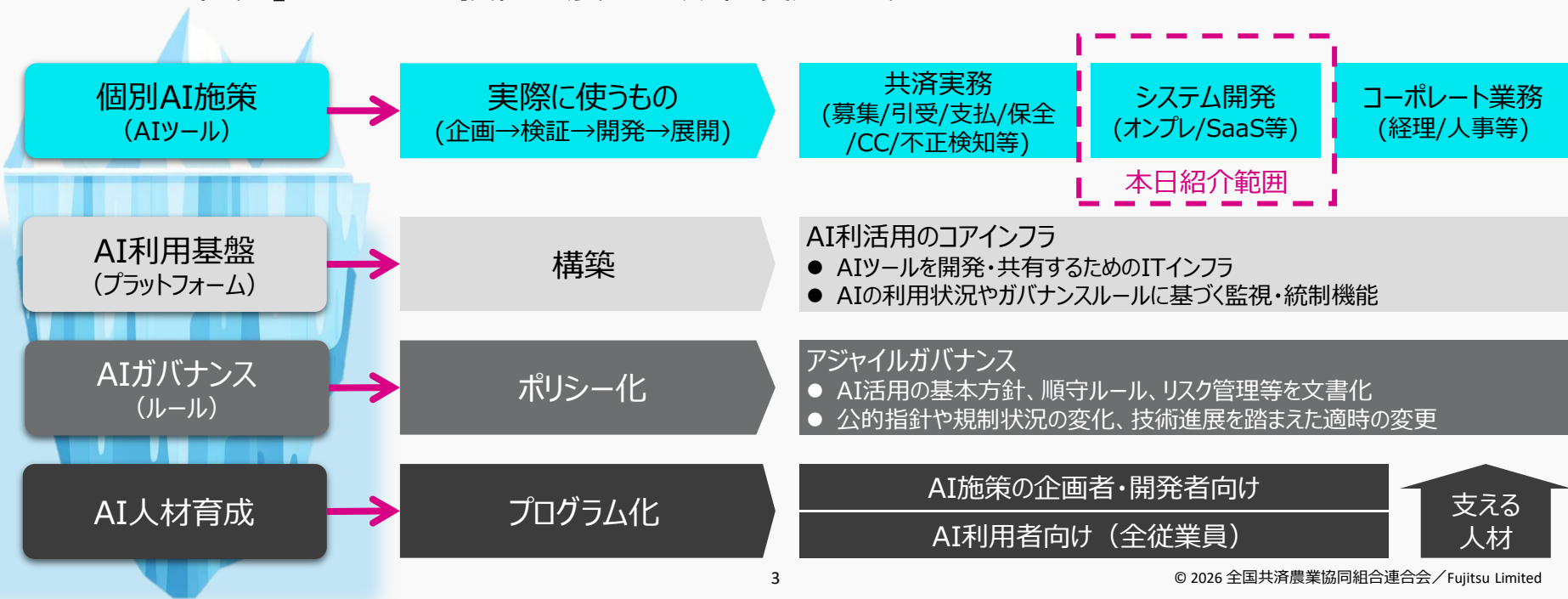
富士通株式会社
Uvance Wayfinders
Global Technology Lead

三原 哲

- 海外ITベンダーなどを経て、20年以上にわたり、コンサルティング会社で、大規模システムのアーキテクチャ刷新、データ&AIに関する取り組みを実施
- 2024年6月より富士通に参画。
グローバルでテクノロジーコンサルティング領域を統括

JA共済におけるAI活用

- 共済実務における利活用に加え、コーポレート業務での利活用も促進
- これらを支えるガバナンス（文書）やプラットフォーム（仕掛け）を表裏一体で整備
- 「システム開発」については、技術進展により期待度が高い分野



- 全国約500JAの組合員・利用者、地域住民の皆さまの暮らしをサポートするため、「ひと・いえ・くるまの総合保障」を提供しており、契約者数は約1,300万人
- 長期間にわたるご契約を支えるための基幹システムの規模や体制も巨大

契約者数 約 1,300万人

生命総合共済 <長期契約>



契約件数 : 約 2,132万件
総保障金額 : 約 74.5兆円



約 [] LOC
(長期系システム)

建物更生共済 <長期契約>



契約件数 : 約 891 万件
総保障金額 : 約 135.9 兆円



約 [] LOC
(共通システム他)

自動車共済・自賠償共済



契約件数 : 約 818万件
自賠償台数 : 約 647万台



約 [] LOC
(自動車系システム)

＝ 段階的なモダナイゼーションも同時並行で実施中 ＝

総システム規模 約 [] LOC[≒約 [] ステップ] × 総開発体制 約 X,XXX名

システム開発分野における課題認識

- 過去の歴史の中で、設計思想や開発標準の異なる多様なシステムが存在
- 将来にわたり安定的にシステム開発を継続するには有識者への依存を最小化していく必要
- その解決手段の一つが「AI駆動型のシステム開発モデルへの転換」であると認識

共通課題（一般論）

複雑化×工数増加・品質確保

- ・ 経年での商品追加（仕組改訂）や事務改善により、アプリが肥大化・複雑化し、影響分析や無影響確認テスト等で保守開発工数が増大
- ・ 結果、デグレや障害発生リスク対応として有識者への依存度が高いが、有識者は減少傾向

システム横断的な品質統制・管理

- ・ 異なるシステムが連携して業務を支えている一方で、各システムで稼働環境、設計思想、ルール、文書などが異なり、横断的な品質の統制・管理が大きな負担
- ・ 古いシステムでは、当初からの設計文書がマスタ管理されていないケースあり（差分開発の設計文書のみ）

その原因は？（AI検討前逡巡）

影響分析負荷が増大

（既存ロジックへの影響、
環境バージョンアップ時の非互換調査、等）

無影響確認のためのテスト工数が増大

品質担保のための作業工数が増大

（レビュー、各種コミュニケーション、等）

プロジェクト管理負荷の増大

開発者の習熟時間・コストの増大

障害・問い合わせ対応時間の増大

どうやって将来につながるか

AI活用による期待値を整理（2025.8~）

期待値	システム開発における適用場面（仮説）
大	● コードの自動生成による作業代替 ● テスト自動生成支援
中	● 業務の理解支援（AIによる業務内容回答） ● 設計文書の作成支援 ● 脆弱性検出および修正支援 ● 一次レビュー、チェック等の支援 ● 問い合わせ対応・障害原因調査支援
小	● 影響分析支援 ● 保守性向上のための内部構造改善支援 ● プロジェクト管理支援
一	● システムアーキテクチャ見直し ● 情報システム戦略策定・体系化・ルール統一 ● テスト自動化 ● 品質の工程横断的な判断

システム開発×AI活用の全体像

- AIを「人を支援し、属人化しがちな知識を組織の資産に変えていくための手段」と位置付け、いきなり全自動を目指さず、段階的に深化させていくアプローチを選択
- ポイントは、事業を支えるシステムの「持続可能性を確保し、将来につなぐ」こと

「知識を組織の資産に変える」べく品質を担保しながら段階的に深化

期待値	システム開発における活用場面（仮説）
大	● コードの自動生成による作業代価削減 ● プラットフォーム生成支援
中	● 業務の理解支援（AIによる業務内容説明） ● 設計文書の作成支援 ● 開発性検証による修正支援 ● 一次レビュー、チャット等の支援 ● 問い合わせ対応・障害発生時の調査支援
小	● 影響分析支援 ● 保守性向上のための内部構造改善支援 ● プロシージャ管理支援
—	● システムアーキテクチャ最適化 ● 情報システム戦略策定・体系化・ルール統一 ● AI活用検証 ● 組織文化・工程制約の把握



【Lv.3】
コーディング/テスト支援

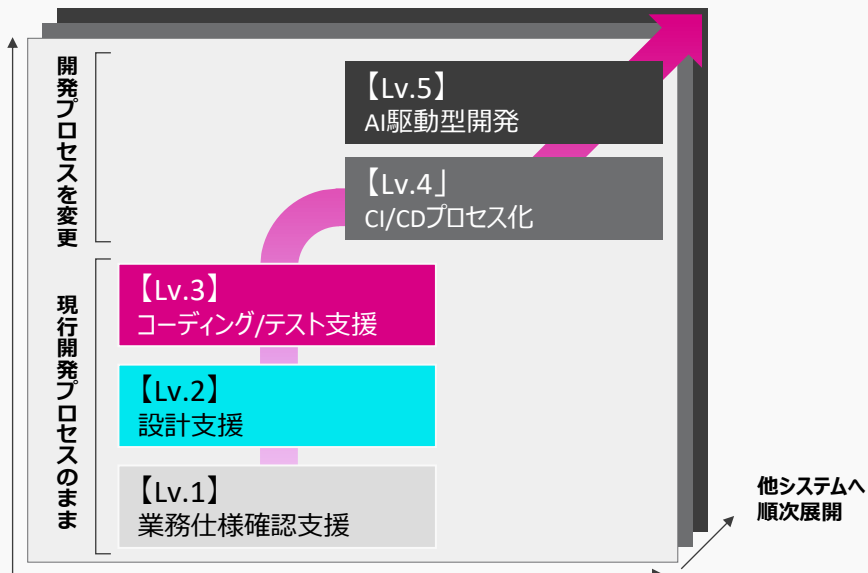
■ 勇気をもって本番で使う！ ■
最も期待値も高いため、早期に本番実装しながらブラッシュアップ

【Lv.2】
設計支援

■ 避けられない通過点！ ■
膨大な量（数万点）の設計書をAIの可読性を意識した形式に再編

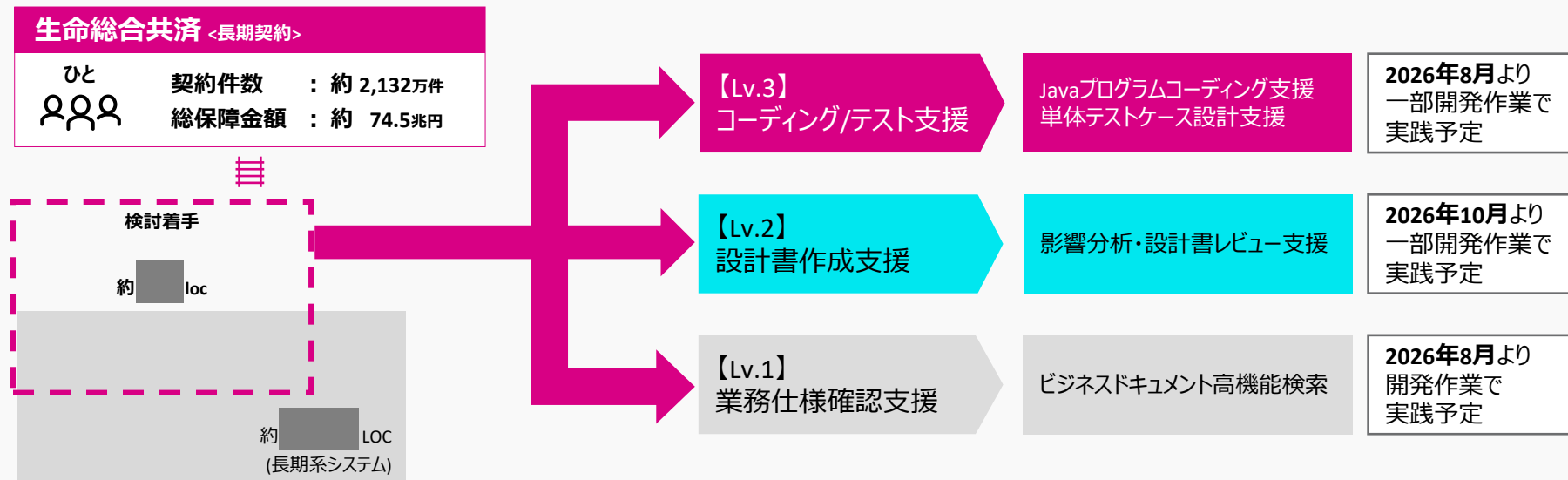
【Lv.1】
業務仕様確認支援

■ 今やらねば断絶する！ ■
ベテランの知見を吸収しつつ、初任者でもタスクの理解や自己解決を促進



これまでの取り組み

- AIを活用した業務改革の取り組みの一環として、2025.8より富士通社と共同で検討開始
- 現在、以下3つの取組みを積極的に推進
- 本年度内に生命総合共済の基幹系システムの一部の保守作業において実践投入を予定



【Lv.1】業務仕様確認

膨大な「約款」や「事務マニュアル」に記載されている複雑な業務仕様をRAG化することで、システム開発に役立てる。

🧠 構想

膨大な約款や事務マニュアルから、業務仕様を確認する作業を効率化

🧠 課題

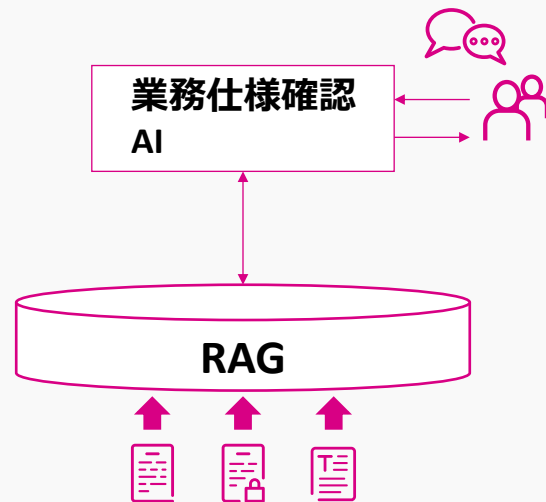
- ・ 情報量が多すぎるが故の誤回答
- ・ 複数資料をまたいで解釈し、事実と異なる回答を生成

💡 解決策

- ・ 問い合わせの意図をAI自身に判定させ、その結果に応じて、動的に検索対象のドキュメント範囲を絞りこむ
- ・ ドキュメントは業務構造に合わせた粒度で分割し、AIが文脈を誤解しにくい形に整える
- ・ 利用者側のリテラシー向上

期待効果

- ・ 経験豊富なメンバーの知見・ユースケースをもとにチューニングし、新規参画メンバーの分析精度・速度を短期間で向上



※ 多数の文書、かつ文章量が多い

【Lv.2】設計支援

膨大な設計書への変更箇所の特定作業、修正作業、レビュー作業をAIエージェントを活用することで、生産性を向上させた。



構想

- 改修仕様の影響分析
- 設計書の修正支援
- 有識者によるレビュー負荷軽減



課題

- 設計書がAI向きではない
(EXCEL方眼紙)
- 膨大な(数百種類、数万)設計書

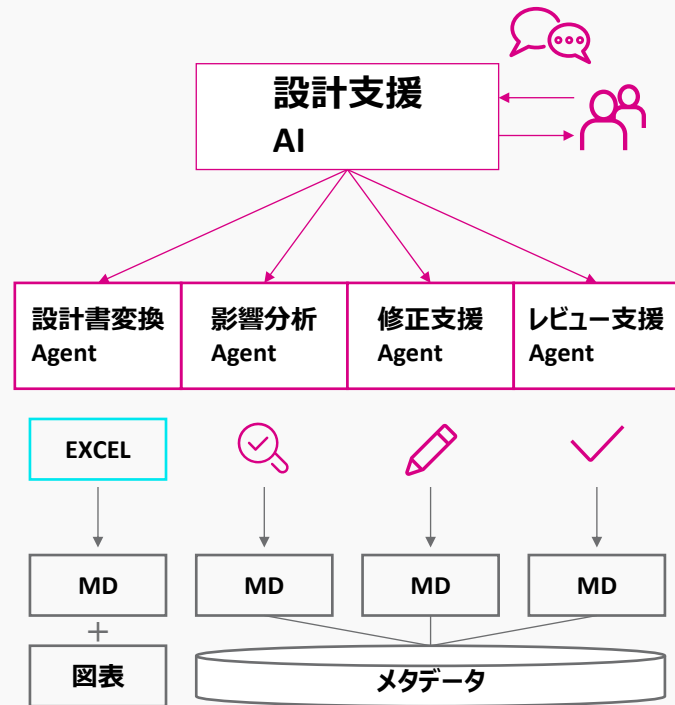


解決策

- 文章部分をマークダウン形式に変換、画像や図は人が補完し、必要な情報を文章側に反映
- 数百種類、数万の設計書の「関係性」を理解させるためのメタデータ整備

期待効果

- 設計書間の関係性など、経験豊富なメンバーのなかにある暗黙知を、エージェントのスキルとしてメタデータ化することで分析精度・速度が向上
- 過去のレビュー結果等をRAG化し暗黙知をプロジェクト内で共有予定



【Lv.3】コーディング/テスト支援

既存コードの解析や変更箇所の特典、コード生成・テスト生成をAIエージェントで支援することで、開発生産性を向上させた。



構想

プログラムやテストコードの生成を自動化



課題

- 曖昧な記述から、ソースコードの生成が困難
- 大規模なコード
- 変更箇所以外は変更不可

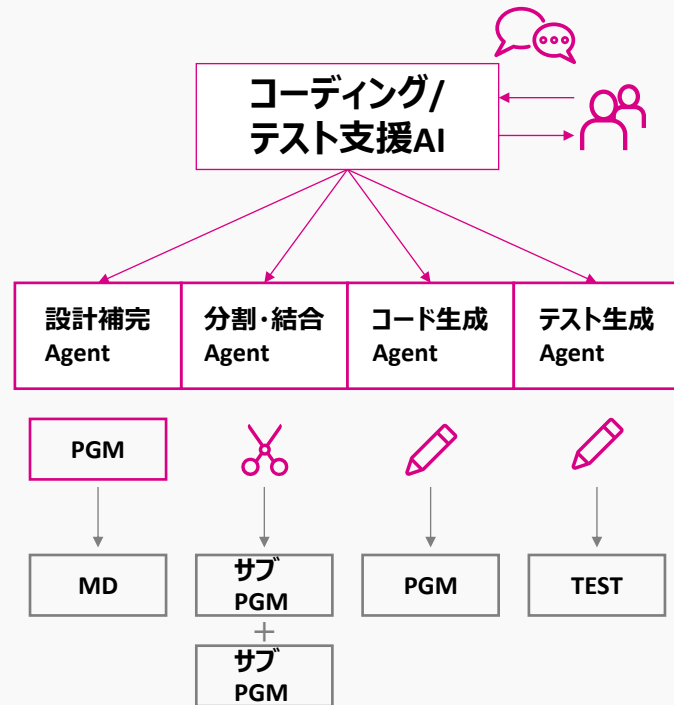


解決策

- 改修時には、**既存コードを解析し、不足している設計情報を補いつつ、コード生成やテスト支援を実施**
- また、大規模なコードは、**意味のある単位に分割し、AIが処理可能なサイズで処理・再構成を実施**
- 動いているコードを正とし、**変更箇所のみを特定し、それ以外のコードが変わらないことを担保**

期待効果

過去の**レビュー実績（暗黙知）**をスキル化することにより、AIによる高精度の初期コーディングが行われることで、**レビュー者の負荷を大幅に軽減**







AIは万能ではない という前提で

1



仕分けとマッピング

- どこに使えるか、どこを人が担うべきかを明確にしながら、使えるところから積み上げる
- というヒートマップ/実装ステップの手法は定着

2



全てのLvでのベテランの関与

- 属人化した知識を、少しずつ形式知化
- 壮大に構えるよりも、各プロセスで“有識者に関与してもらう”地道な積み重ねが、将来の持続可能性につながる

3



様子見してはすなわち後退

- 技術進展を様子見したい、も解る
- が、要員減少や知識継承の問題を考えると、“今やらなければ後退に等しい”

本資料の取り扱いについて

- 本資料は、Fujitsu Experience Day 2026来場者向けに提供するものです。
- 本資料について、当社および登壇企業の承諾なく、複製、転載、再配布、SNS等への掲載を行わないようお願いいたします。
- 本資料の内容は、発表時点における情報に基づいています。

【お問い合わせ先】Fujitsu Experience Day 2026 事務局 contact-events-fed@cs.jp.fujitsu.com

Thank you

